

二次元ドリームノベルズ/PDF立ち読み版

# 紅の破壊天使 スカウト

小説 新居 佑

挿絵 なかざわひのと

第一章

紅と蒼の輪舞

006

第二章

涙、すれ違うとき

044

第三章

白い運命

068

第四章

屈辱の墮天使

085

第五章

白濁に染まる仔猫たち

159

第六章

守りたいもの

246

## 登場人物紹介

Characters



### スカーレット

悪の組織“ヴァルクエット”の女幹部。組織内ナンバーツーとして君臨し、抵抗軍を粉碎する。

### セルヴィス

“ヴァルクエット”に対抗する抵抗軍メンバー、早川奈桜<sup>はやかわ なぎ</sup>が強化スーツを纏った姿。正義の使者として、市民たちの精神的支柱となっている。

### シオン

抵抗軍に守られた街で生活を送る少女。

### ガルデ

“ヴァルクエット”生え抜きのサイボーグ戦士。組織のナンバーフォーの地位につく。

「なに、酔ってんだよ。ケツで感じる変態がつ。そんなにコイツが欲しいのか？ ああつ、スカーレット様よおっ」

首を後ろに回すと、幾人もの戦闘員が股間から、同様の巨大勃起ペニスを滾らせている。無理やり膝を立たされ、グイとお尻を突き出された。前足を折り曲げた犬のような姿勢に、屈辱感がふつふつと湧き上がる。

「くっ、お前ら……っ。ふざけ……」

言われてフツと正気に戻った。牝犬のようにモノ欲しそうな顔をしていた自分が思い出され、顔がカーッと赤くなる。恥ずかしさを紛らわすように、深紅の女戦士はキュッと唇を噛んだ。

「っ!? ひうっ、そこ触る、なあ……くっ」

張り出した骨盤にゴツゴツとした両手がかけられる。八の字に開かれるスラリと伸びた脚につられ、伸びをする猫みたいに腰が反った。

ビクンと震えた女戦士の唇から、羞恥にまみれた乙女のような弱い声が漏れ出る。立て続けにイカされ、パツクリと大口を開けた可憐な陰唇——それをかろうじて覆っていた黒のスーツが、わずかに横にずらされた。ジユクリと溜まった女蜜が、冷たく磨かれた床に向かってトロンと糸を引くようにこぼれ落ちた。

紅の戦闘スーツから覗くこんもりとした恥丘には、熟した二重の妖花が咲き誇っていた。淫蜜に濡れて粘り気を帯びた恥毛は薄く縮れており、少女のような初々しさが感じられる。

真下で蠢く肉門に共鳴するように震えるピンクの陰唇は、処女でありながら、まるで娼婦のそのように濃い牝匂を辺り一面に香らせていた。

横から豊満ヒップを覗き込むように、数人の戦闘員がギョロ目をきかす。透き通ったサーモンピンクが美しい女の陰唇を淫猥に彩る様を目に焼きつけようと、いまや数十人分の視線が女幹部の股間に咲く花びらに釘付けになっている。

「ケケッ、アソコは生意気な顔と違つて純真そのものだけ。ほおら、見ろ。本気汁出しながら、かわいくヒクついてらあ」

やや幼さの残る肉唇は、初めて受ける超至近距離での視姦責めに対して、あまりに無防備だった。スカールレットが抱える恥辱の感情をダイレクトに反映する陰唇は、ヒクヒクと淫らな舞を繰り返して、男たちを悦ばせてしまう。うっすらと花びらにかかる生暖かい息さえもが、敏感な女唇にとつては淫猥な拷問具だ。

「うる……さいつ。離れろつ、今すぐに！ さもないとお前——」

「どうにかなるつていうのか、ああつ!?」  
「プチュ……」

無力な女戦士の脅迫に腹が立ったのか、潤んだ花卉に毒々しい赤肌色の亀頭が押しつけられた。スカールレット自身の意志とは関係なく、粘り気を帯びた肉貝が牡の切っ先を歓迎するように、ゆっくりゆっくりと女芯に誘い込んでいく。

「ふ、お……はあ……やめろ……おつ」

先端を軽く挿れられただけだというのに、手足の先まで桃色の電流が走り回って、全身が蕩けるような痺れに襲われた。顎が上がり、腰がわずかに上下する。強気だった表情が、何か許しを請うような、言ってみれば奴隷の表情へと変わる。

「へえ、あんたもそんな顔できんじゃないん……でもな、俺らが見たいのはもつと別の表情なんだよ。クク、ワリイなあ」

背後に構えた戦闘員が妖しい響きを発した。邪な感情を少しも隠そうとしない低い声に、女豹のうなじがゾワツと震え、背筋を甘い稲妻が走り抜ける。

「くっ……お前、なにを言ってる……まさかっ!？」

「まさかもなにもねえんだよ、てめえみたいな牝奴隷にはなっつ」

男の腕に力がこもった。スカレットはこれから起こるだろう恥辱行為を前にして、眉が下がり、唇がフルフルと震えた。ただ一点、イボイボのついた亀頭が迫る肉アケビだけは、理性の感情などおかまいなくトロトロと粘つく牝粘液を搾り出している。

「——やめっ……あああああっつっ!」

ドチュオオツツツ、グチュチュオオウウツツ!

柔らかい肉花にズブズブと長大な肉棒が埋もれていき、女の白い喉がググウンつと反り返る。充血した蜜壺は、牝の挿入を待ちかねていたように肉ヒダをせわしなく蠢かせた。

牝の意志とは関係なく下半身から生まれる快感が、床にプニユリとついた乳房の先にまで浸透し、身体中に激しく燃え盛る欲情の火が入る。

同時に、女の秘唇の入り口をブチブチイイッという嫌な音が駆け抜けた。

「うひよおおっ！ こいつは信じられねえ締めつけだぜ。しかもよ、処女だったとはなあ。あのスカーレットがつ。意外と清純派だったんだな、おい!？」

「く、ううう……は……んぐう……い、言う……なあっ」

(っ、こんな……わたしの初めてが……こんな奴に……っ)

女として最大の屈辱。女唇から流れる生ぬるい血の感触が、スカーレットの心に渦巻く屈辱感を倍増させる。立てた爪が磨き上げられた床を掻き穿った。

「さすがは淫乱スカーレット。もう痛みはないようだな。ケケ、イイ表情してるぜえ」

ゴシウゴリユ……ズリュチュチュズシユオオオツ……。

「こいつ……ひ、あううっ……う、動く……なんてえ……っ」

言われたとおり、破瓜はかの痛みなど一瞬で、今では皆無に近かった。

お尻を貫かれる感触とはひと味もふた味も違う甘美感が、振り返った背筋をビリビリと刺激する。ぬめり気を帯びた肉槍は、まだきつい牝肉のカーテンを力づくでこじ開けながら、初々しい女壺に獣欲の味を覚え込ませていった。

「ああっ、く、んんんううっっっ！」

屈辱の女豹は、初めて体験する肉棒の感覚に悩乱した。下半身から容赦なく発する悦楽の波動が、脳髓にまで侵食を開始する。なんとか逃れようと必死に伸ばした細い腕は、虚空を掴むどころか、前のめりになる豊満な身体を支えるだけで精一杯だった。

ズボオツツ、グシユ……ズズンズオオオンツ。

陵辱者は軽く舌なめずりをすると、むしゃぶりつきたくなるような桃尻に手をあて、ガツシリと固定した。腹に力を込め、口元にサディスティックな笑みを浮かべる。

「うぐあ、はあう……っ。ば、かな……気持ちよく……やめろっ、もうやめええ……っ」  
(はうぐううっつ、戦闘員なんかの汚れたペニスで……わたしの膣内が……くそおつ)

いくら屈辱に唇を噛んでも、先ほどまでのものを遥かに凌ぐ突き込みに、グジユグジユの蜜壺が踊り狂った。普通のモノなど比べものにならない巨大肉棒を、盛ることを学んだ妖艶ボディが柔らかく卑猥に包み込む。

お腹の裏側が、大きく開いた傘に隙間なく蹂躪される。ナイフのような鋭さを持つ牝豹のボディがグウンと反り返る。溢れ落ちる本気汁が、前後される肉棒にネットリと絡みついて、漏れた淫臭に牡の肉欲がさらに高まっていく。

「ふ、おお……抜けええっ！ 命令だ……く、殺すぞ、お前ええっつ！」  
奥歯をカチカチと鳴らしながら、プライドを絞り出して吼える。

半ば快感に呑み込まれかけた理性の抵抗を、戦闘員は目を細めて笑い飛ばす。腰をガシリと押さえ込まれているため、身動きひとつできない。それどころか、スリムだが肉感的な下半身を前後に揺さぶられ、自分の意志とは関係なく合点腰を打たされてしまっていた。

「はあ……あ、ひきいいっ！ 動かすな……あ。本当に、今すぐやめないと——っつっ!?」  
瞬間、串刺しの刑に処された牝の膣内で、女をさらに狂わす異変が発生した。



「いつまでも偉そうに命令してんじゃねえぞ、この牝がっ！ ケケケ、わかるか？ お前はもう俺たちに歯向かえるような身分じゃねえんだよ、オラァツ！」

女を犯すことを目的に作られたマシンプニスは、ネチネチと揉み込んでくる肉壁を押し返すように、ムクムクと自らの体積を増やしていった。さらにふた回りほど嵩を増した魔根は、恐怖に駆られる女戦士に破壊的な快楽を植えつける。

「ふ、かいいいっつ……お腹が、壊れ……あぐうおおっつ」

隙間なく張りつく肉ベニスによって、自分の膣内がどんな形、長さなのかがありありとわかった。肉芯がグジュグジュに燃え盛り、気丈な女幹部の理性を焼き切っていく。

睨みつけた切れ長の瞳が、悔しさに包まれながら蕩けていった。床に擦りつけられた乳房から駆け抜ける甘い刺激が、牙を失い這いつくばった女豹の自尊心を悦楽の園へと昇らせる。

（あ、頭が焼け……るううっつ。声、出さないとおかしくなる。こんな、癖になりそうだ……戦闘員なんか……戦闘員なんか……）

胸やお尻はともかく、セックスへの抵抗力などゼロに等しい黒髪の美女は、ゴボゴボと淫らに煮え上がる快感のマグマに翻弄されるしかなかった。男根をさらに搾り取ろうと蜜壺をくねらせる牝本能に任せるままに、男を滾らせる甘く太い艶声が、徐々にポリウムを上げていく。

「ヒヤハハハハッ、凄えなんでもんじゃねえぜ？ このマゾ女、罵倒される度に膣内で

ギンギン締めつけてきやがるっ。おい、スカレットよお。お前、幹部なんでもったいねえぜ。どう考えても天職は牝奴隷だな……なあ、お前らもぶっかけてやれよっ」

下卑た薄ら笑いを浮かべて、男の突き込みが速度を増す。すでに人間サイズではない魔ペニスを8の字にくねらせながら、ヌメリを帯びて収縮を繰り返す若穴全体に満遍なく擦りつけた。

同時に十数本もの剥き出しペニスがスカレットの淫熱で蒸れた身体に向けられる。皆、ドクドクと力強く脈打っており、今にも暴発してしまいかねないほどに滾っていた。

「ふへえるおおっ……手が熱い……ああ、胸にもペニスが……んぐうんももおおっっ！」

甘く霞む視界すべてがペニスといつても過言ではなかった。いや、視界だけでなく、全身の感覚がペニスに覆われていた。両手にペニスを握らされ、ピンッと勃った両乳首を肉棒の先端でグリグリと擦り弄られる。自慢の黒髪や匂い立つ脇の下に、かわいらしい臍の穴にムッチムチの太腿……ありとあらゆる場所が魔ペニスによって蹂躪されている。

（わたしは、戦闘員に汚されて……あ、ああ……何もできずに……牝、奴隷に……）

身も心も肉棒に支配されているような感覚に、女幹部として絶対的な権勢を誇ったスカレットの自尊心が歪んでいく。すでに十分すぎるほど媚薬を体内に染み込ませている紅の死天使は、自分を拘束する牡の淫気の虜とらになりつつあった。

「いやらしい面だぜ。こんなエロいのに、偉そうにしゃがって……お前のエロエロな身体はなあ、俺たちに尽くすためにあるものなんだよっ！ 覚えときなっ、スカレットっ！」

戦闘員たちの腰の動きが跳ね上がった。サイボーグが可能にする衝撃的な超速フアックに、ただの乙女に成り果てた女戦士の理性が掻き消されていく。

「くひやあああうおおつっ！ イ、イギイツ、ああぐあああああつっつっ！」

肉壁を抉り取るドリルのような勢いのままに、亀頭が子宮の入り口に体当たりをかける。的確で執拗に女の弱点を擦り弄る極太マシンペニスに、スカーレットの全身を弾けた稲妻が狂ったように駆け巡った。

（くああつっ、感じるっ！ 感じすぎて……っつ、翔ぶううああつっつ！ アソコいいっ、グジュグジュに蕩けてしまいううううっつ！）

身に着けたスーツよりも紅く充血した肉アケビから、プシュプシュと淫猥な音が漏れ響く。深紅の墮天使の振り切れた快楽ゲージを象徴するかのようには、泡状になった女蜜が、魔ペニスの抜き出しに呼応して勢いよく吐き出された。

身体の奥が火がついたように熱い。初めは苦しかった肉棒のストロークが、今では大量に分泌された潤滑蜜のおかげで、直接に快楽だけを伝えてくる。ひっきりなしに身体が求める疼きによって、下半身すべてが淫らな桃色電流の発電所に変貌してしまっていた。

「らめえええつっ、はひあいいいおおつっ、イ、イひいいいつつ！ 狂うっつ！ わたし、戦闘員のペニスで狂ううううううっつっつ！」

お腹が狂おしいほどの快楽によって混ぜ返され、淫猥な蜜壺へと作り替えられていく。もうすでに戦闘員のペニスに対する屈辱感など吹き飛んでいた。

クライマックスに向けて怒濤のラストスパートをかけてきた男根の猛烈ファックに、居丈高な女幹部のプライドが無残なほどに砕け散る。

ジュブウウオオオツツ！ ゴシュリイイツツツ！ ズブオオオオオツツ！

淫らに燃え盛っている場所はアソコだけではない。乳首は、水に漬ければ湯気が出るのではないかと思えるほどに紅に染まっているし、手や太腿などは蜜壺そのものと断言できるほどの快樂発生器だ。ペニスに触れている場所すべて……つまりスカーレットの存在そのものが、快樂の渦だった。

「はむぐううつつ、イグウウツツ、イグウウウツツ！ もう……もうらめえええつつつ！」

強烈な淫撃ピストンがなければ、物足りなさで狂ってしまうのではないかとさえ思えるほどに、頭の中がセックスのことで一杯になる。興奮して真っ赤に染まった美麗な顔立ち、勝気だった表情から、牝のフェロモンをたっぷり含んだ涎と汗にまみれた奴隷の表情へと変わっている。盛り上がった乳首は魔悦リングに噛みしごかれている。完全に開通しきった女陰唇は、先ほどまで処女だったとは誰も想像つかないほどに濡れそぼり、機械ペニスを、肉がめくれ上がるくらいおいしそうに咀嚼していた。

瞬間、ドッグスタイルのスカーレットの背筋がビイインッと伸びきり、ムッチリとした太腿がビクククツツと異常な痙攣を起こした。

「はおおおうあああつつつ！ イグウウウウツツツツ！ おぐおおおつつつ！」  
ビクウウウツツツ！

弓なりに反り返った肢体から、玉のような汗が弾け散った。溜まりに溜まった淫悦マガマの噴火に全神経が切断され、代わりに甘く痺れる快樂糸が脳髓をすみからすみまで縛りつける。剥き出しの豊胸がブルンと揺れ、両腕が硬直したかのように突っ張った。

「くうっ、すげえ締まるなっ、この淫乱がっ……我慢できねえ、オラ、もう一回イってきやがれっ！」

キユキユウツと最大限に締めつけられた亀頭が、ムリムリと膨張し始める。最後のトリガーである子宮口へのノックが終わると、縦に割れた鈴口から熱く滾る欲望の塊が、勢いよく腔内に噴射された。同時にすべての魔ペニスが噴火する。

ドピユオオオチユグオオオオオツツツ！

「っふえあああつつつ?! ひぐうっ、あ、く、イッゲうううつつつ！ めふどれひひ……わふあひいっつ、めふふおれひいっつ！ イグウウウツツツ！」

いやらしい魔根の先端からおびただしい量の白濁液が堰を切ったように爆発する。イッたばかりで収縮しきった腔内を欲望の奔流が埋め尽くした。

「セーエキ熱いいいいっつ！ いっふあいかかっへるっ！ あおおおおっつ！ イクツツ！ イクツツ！ へんほうひんのセーエキいいいっつ！ わたひ、きもひよふひつてええつ、たえられふあひっ！ イック、イクのるあああおおおっつっ！」

熱い灼熱の流れが理性を残らず削ぎ流し、頑なだった使命感が特大規模の暴風にさらわれる。大事なものを捨て去り、ドロドロの精液まみれになった蕩け顔は、悦楽に酔ってし

まったかのように艶やかな潤いに満ちていた。

ブチユオ……ドロオオオ……。

ペニス引き抜かれた肉唇から、ベツトリとした精液が垂れ流れてくる。湯気を立てる蜜泉と混じり合い濃密度を増した白濁液は、ガクリと墮ちた死天使の股間を卑猥に彩り、床に膾出し絶頂の刻印となる白膜をトロリと張った。

(はあはあ……こ、おとおお……い、イイ……きもひ、イイ……)

快楽に染まった理性をなんとか奮い立たせようと、溶けた顔を引き締めようとした。身体中に付着したネトリとした熱い塊が糸を引いて肉アケビからこぼれ落ちるのが、ひどく気色悪かったが、そんなことに構ってはられない。このまま快楽漬けにされることは絶対に阻止しなければならなかった。しかし――。

「つつつ!? あ、ああつ、なんだこれえええあああつつ!?」

無様に崩れ落ちていたグラマラスな肉体が、スイッチでも入ったかのようにビビクンツと跳ね起きた。両手、両膝を床に突っ張って、興奮した犬のように舌をハッハッと出し入れさせる。

「あ、熱つ、熱いいいっ……お腹がつ、口もお尻もみんな……あつつ、つううううあああつつつつ!」

掲げられたお尻から伸びる肉感的な太腿がバクバクと開いては閉じる。何かから逃れるように黒髪を振り乱し、牝牛のように張り詰めた乳房がグリグリと床に押しつけられる。



(ななが……い、いったいいっ!! 欲しい……刺激が欲しくて堪らないっ……胸だけじゃ  
ぜんぜん足りないいいいっ!!)

まるで焼けた棒を膣内に直接ぶち込まれたようだった。発情したときに感じるジンジン  
とした感覚を、一気に数千倍に高められた気がする。冷静に思考することはおろか、呼吸  
を整えることすらも難しい。

無残に引き裂かれ白濁まみれになった紅の戦闘スーツが、灼熱の淫獄に投げ込まれた美  
女体をギユギユッと締めつける。

「始まったぜ……クク、ここからがおもしろいんだよなあ」

「そうだなあ。おい、聞けよ牝豚あ。お前の“それ”な、俺たちの精液のせいよ。俺たち  
に犯されて、妊娠することはない。が、あとはお前が一番わかてるだろ? 身体に直接  
染み込んだ媚薬成分が、刺激なしではいられない身体にするのさ。ハハッ」

「な、なんだ……とおおっつ!? コレはお前たちがっ……くっ、おおおっつっ!」

スカールレットは戦慄した。わずか一回の膣内出しだけで、自分が自分でなくなるほどに  
発情させられてしまっている。このまま戦闘員全員に輪姦されれば、もう元には戻れない  
かもしれない。

(い、いやだ……そんな……馬鹿なこと……)

「くっ、ひ、卑怯者、ども……があっつ!」

快楽の波動を一瞬堪えて吐き出した攻撃の言葉すら、戦闘員たちは楽しんでるように



見えた。飛べない白鳥をジワジワと追い詰めるような、いじらしい顔つきが発情した美女の屈辱感を一層煽る。

「どうだ、お前はもう破壊天使なんかじゃねえっ……んん、チンポ欲しいか？ ギャハハ、欲しいに決まってるよなあ。そんな表情、発情してる牝豚にしかできねえぜ？」

磨き上げられた床に映る自分を見て、スカーレットは絶句した。細顎がクツと上がり、悩ましげに垂れた眉毛と相まって、絶妙の蕩け顔が完成している。

(あ……ふうおお……あん……く……ああ……)

心の奥底で黒い欲望と侮蔑に怒りを滲ませながらも、身体はまったく言うことを聞いてはくれない。悔しさを置き去りにした暴走本能が加速する。困惑の美女は憎き戦闘員の前だというのに、自ら脚を広げて床にぺたんとお尻をつけた恥ずかしい格好を取ると、肉脂肪のたっぷり詰まった淫乳を両手でギシギシと揉み込み始めた。

口から甘い息をフッフウと吐き出し、時折、恍惚に満ちた艶やかな表情を見せる。指の一本一本が巧みに連動し、はちきれそうな巨大バストをアンダーからトップまで丹念にしごき上げていく。人目を憚らず、一心不乱に豊胸自慰に没頭する様に、女幹部としての鋭さや威圧感はまだ感じられない。まさに痴女そのものといえた。

(ああっ、イ、イイッ。指止まらな、いいいんっ！ 見られてるのに、恥ずかしくて悔しいのに……も、狂ううううっっ！)

気がつけば、スカーレットは戦闘員に恥じらいの上目遣いを送っていた。わずかに残る

悔しさなど、もう何の役にも立たない。腹の中に渦巻くたまらない疼きを鎮めたい、鎮めてほしい。愉悅に浸りきった甘い感覚が脳髓そのものを支配している。

「見てみるよ。本気汁がお漏らしみたいになってるぜ。お前、幹部じゃないのかよ？ 戦闘員にモノ乞いするなんて、牝以下だな。肉便器だ肉便器っ、ハハッ」

言った戦闘員は、ズイッとギチギチに勃起した巨大魔ペニスを迫り出し、くねる女戦士の腰の下へと侵入する。他の戦闘員がスカーレットを軽く持ち上げ、蜜壺の位置を合わせにかかった。

「は、ああ……やめろ……くっ、離せええ……っ」

身体は快楽に屈しても、奥底に押し込められたプライドや使命感は残っている。期待してやまない揉み手と陰唇の蕩け汁とは反対に、死天使の人間の部分はズキズキとした嫌悪感に晒され続けていた。

「いいねえ、さすがは『元』ナンバーツーのスカーレット。まあ、せいぜい壊れないように頼むぜ。これで終わりじゃないんだから、よっ！」

ズリュズリュ……チュオオ……。

（ああ、入るうっ……太いチンポ、入ってくるうう……）

「はふ……あ、ああ……ほおおおお、う……」

騎乗位の体勢のまま、涎を垂らした蜜壺に引き込まれるように、機械ペニスが根元までズブズブと挿入されていく。軽いお預けを喰らっていたグラマラスボディは法悦の極致に

誘われ、全身の汗腺が開ききり、引き締められた女肉がブルブルと悦びのダンスを踊った。「ふおおおうつつつつ！　るくほおおあああつつつ！　イ、イヒイイイツツツ！」  
深紅のスーツに彩られたコケティッシュな女体が、ギユウウンツツと急激なアーチを描いて悶絶した。脂ののった太腿がビクンツツと振動し、ぽてつとしたエロカワイイ双乳が天を衝くように跳ね上がる。

男根の先端部が子宮口にぶつかかった瞬間、光が脳裏を焼き、全身の細胞が沸騰した。抗うことすら馬鹿馬鹿しく思える快楽の奔流が、膣内を掻き回し、女をただの牝へと飛翔させる。

「なんだあ!?　もうイっちまったのかよ？　派手なエロ面晒しやがって。マゾ豚がつ」

「あ、あう……イ、イイ……気持ち、イイ……」

嘲笑う男の声など半分ほどしか耳には入らなかった。そんなことに神経を注ぐなんて無駄なことは覚醒した牝の本能が許さない。一瞬、意識も記憶もすべてが吹き飛び、ただ快楽だけが周りを満たすあの感覚がたまらなく愛しかった。

ズゴン、ズゴリユウウツツ、ズボボオオオツツ！

「ひいぐううつつつ！　いい、よふひるつつ！　はあうぐううつ、イクイクウウツツ……みんなおかしくなつて……イクツツ！」

休む暇など与えられず、強烈なピストン運動が開始された。円を描くように出し入れされる機械ペニスに、欲情しきった肉ヒダがうねるように絡みつく。尖った無数のイボイボ

が充血した壁面を抉る度に、まぶしすぎる閃光に強気な理性が掻き消される。

「い、いぎつ、や……いやだ……またくるうっ！ 我慢できないっ、きゃひいっつっ！」

いったばかりの身体が激烈な快楽の渦に吞まれて再び天昇する。戦闘員の思うように弄ばれる深紅の女体は濃厚に香る牝臭を辺り構わず撒き散らし、肉の悦楽に酔いしれた。

「お前はもう俺たちに逆らえねえぜっ！ ハハ、一生チンポに仕えさせてやるよっ！」

幹部と部下クズという絶対的だった立場を、完全に入れ替えられた瞳が、屈辱に揺れる。しかし、灼熱の魔炎を宿した淫肉の肢体は、もう止めることなど叶わなかった。仕舞いには自ら腰を振りたくり、戦闘員のモノを愛おしそうに口に呑み込んだ。

「あぐうっ、イクッ！ はうあああつあつっ！ イク、イク……いつてしまいううっ！ お、おぐおああああおおおつっ！ イツツツツグウウウウツツツツツ！」

尚も濃密な本気汁を吐き出し続ける蜜壺を尻目に、野太い艶やかな嬌声が辺りに響き渡る。切れ長の瞳が完全に白目を剥いて、屈服の悶絶を「元」部下の眼前に晒し出す。

ドピユオオオオツツツ！ ビジュルアアツツツ！ ビユクウウウツツツツ！

法悦の淀みに沈んだ黒髪のアへ顔に、勝ち誇ったようにぶっかけられる白濁の豪雨。戦闘員の快楽責めの前に完敗を喫したスカーレットは、屈辱のザーメンを飲み干していった。身体中からムンとした牝の淫気を発しながら、子宮がジクンツと新たな快楽を欲した。

「まだお前を信用したわけじゃないんだからな。本当に潔白が証明されるまで、もうお前を女神だとは思わねえよ。邪魔なんだよつ、一緒に犯すぞ、こらあつ！」

牡たちの欲情した視線とペニスが、拘束された紅の戦姫に向けられる。おそらくこの淫靡な感情を吐き出してしまわなければ、もう収まりはつかないだろう。彼らも元は善良な市民だ。力づくでというわけにもいかない。

(どうしよう……スカレットを助ける、ためには……でも……あ、くうつ)

セルヴィスは一度ゴクリと喉を鳴らした。手があるとすればひとつしかない。しかし、*“それ”* はかなりの勇氣と覚悟を必要とする行為だ。背筋をゾクリとした背徳感が駆け上がる。唇がフルフルと震えた。

(……やらなきゃ……恐れないうって決めたもの。スカレットの、仲間のためならこれくらいなんとも、ないわ……つ)

頬が赤く染まる。涎がひつきりなしに溢れる。けれど、決意だけは変わらなかつた。

「わ、わたし……わたしが皆さんに奉仕します。だから……」

セルヴィスはおもむろに片膝立ちになると、側にいた市民のファスナーに手をかけ、そのままゆつくりと下ろしていった。内側からズボンの生地を力強く押し返していた男の勃起ペニスが目の前にブワツと広がり、視界を覆いつくす。

(ああ……お、大きい……す、ごい……)

思わず息を呑む大きさと熱、そして鼻を突くすっぱい臭いが、跪いた銀髪の女の美貌を

より一層赤らめさせる。

「な、なんだこいつ……そんなエロい格好しやがって……まさかお前のほうがチンポ欲しくなっちゃったのか？ くははっ、お前、正義のヒロインじゃねえのかよ!?」

四方から飛ぶ淫靡な嘲笑に、銀髪の下の美貌が恥ずかしそうに震えた。

プライベートで好きな男性と甘い一夜を共にする……そんなきれいなシチュエーションではない。正義と平和を守護する紺碧の変身スーツに身を包んだ状態で目にする勃起ペニス。しかも、自分が命をかけて守ると誓った愛すべき市民たちのモノだ。

自らペニスを探り出し、芳しい匂いを醸し出す股座にギチリと食い込んだハイレグと、ムチリとした悩殺太腿を見せつけるように座り込む——仲間を救うためとはいえ、正義のヒロインにあるまじき淫らな行為に、黒くて甘い背徳感が女剣士の身体中を包み込む。

一瞬、怖気づいたような表情を見せた銀髪の美女が、意を決したように両の手で優しく肉棒を握ると、掌でペニスがビクビクと跳ね踊る。

瞳を伏せて、唇を開く。きれいなピンク色の舌を怒張ペニスに張りつけ舐める。そのまま顎を反らせて、蛇のようにムワツと広がった口が亀頭の上から男根を丸呑みにし——。

「あむうんつつ、んく……ふぁ……んじゆるうう……」

——しごき始めた。すぼまった唇いっぱい肉棒を頬張り、首を上下に振り抜いていく。両手でしっかりと男根を握り締めてキュウツと搾り上げる。

市民たちが性欲で支配されていることは明らかだった。ならばそれをすべて処理できれ

ば、この暴動は収まるに違いない。救世の女神と敬われた美貌の女剣士は、胸に湧いた恥ずかしさを必死に押し殺し、仲間のために、ただひたすら男の肉ペニスをしごいていく。

「はあちゅ……ふむぐじゅう……んはあ……ちゅばああうう……」

苦い思い出ではあるが、ガルデに捕らえられていた間中、ひたすら犯し続けられた女剣士だ。心は嫌がっていても、肉の快楽を求める熟れた女体が、男を悦ばせるテクニクを勝手に学習し身に付けてしまう。今のセルヴィスは、熟練の娼婦もかくやというフェラテクを有するまでに至っていた。

「ん……んは、んぐ、ちゅば、れろ……ちゅ……ちゅくう、んはあ……」

根元まで一気に頬張り込み、全体に唾ローションを塗りつけて、優しくほぐしていく。裏筋を丹念に舐めしごいたあと、お預けを喰らってビクビクと自己主張する雁首と亀頭に情熱的なキスを贈る。

ワインでもティスティングするかのようには、一番感じる先端部を口の浅いところに含んで、舌の上で転がしながら舐めしゃぶる。鉛玉のようにされた肉棒は、それとは逆に体積を増やし、女を征服しようと押し進めてくる。

「んは、んんん……んえあ……ん、んん、ふぐんっ……んんちゅうう……っっ」

そのタイミングを待っていたかのように、聖女のものとはとても思えぬ強烈なバキューム運動が開始された。ザラザラとした舌表面を肉根に絡みつけるように舐めしゃぶる。荒々しさの中に秘めた、繊細で絶妙な舌のタッチが男の快楽中枢を燃え上がらせ、かつて

ない快感を提供する。

開花した女神の牝本能は、自らの肉欲を昂らせながらも、冷静に牡の反応を観察する。男が軽く呻き、足をブルブルと震わせる。腰使いが押し一辺倒になり、鼻息もどンドン荒くなってきた。

「んえあ、んぐんぐ……ちゅぶう……んんんっ、んいっ……っ」

ここぞという場面で、セルヴィスは吸引パワーを最大限まで引き上げた。自らが知るすべての淫技巧を駆使して、牡を至極の頂点へと導いていく。盛った獣のように激しく艶っぽい声を紡ぎ、まるで男とシンクロするように自らも張り出した腰を振りたくる。

「うおっ、セルヴィス……よすぎる……くうっ、出るううっっ！」

ドパパパパチユオオオツツブオオツツツ！

「んんんんっ！ ふぐっ、ん……あ、はああ……れるん、ぺちや……れるる……」

怒張した肉棒が耐えきれずに爆発し、正義のヒロインの口内に滾った精液をぶちまける。濃く臭いのきつい男汁を、セルヴィスは、「んぐ、んぐ……」と喉を鳴らしながら一滴残らず、お腹の中に流し込んだ。

惚けたように顔を赤らめ、指と唇の周りに残った白濁液を、いやらしくペロリと舐め取ってみせる。牝猫のように背を反らせ、物欲しそうな上目遣いで辺りの男を見回す。

「うおおおっ、セルヴィスの生フェラだっ」

「マ、ママ、マジかよっ!? いいのか、これ!? だったら俺のもしてくれよっ」



女ヒロインのいやらしすぎる生フェラチオに、欲情しきっていた男たちのメーターが振り切れた。自由を与えられた暴れ牛のように、目と股間を血走らせた男たちが、セルヴィスの元へと押し寄せる。

「はあ、んぐっ……いいのよ、手でもしてあげる。ほら、おっきい胸も使つてね。うふふ、気持ちいいでしょう？　ちゅぱ、ちゅぷぷ……れる、ちゅ……」

まるで一匹の牝に群がる野生動物のようだった。他の男を蹴散らしながら、我先にと幾本ものペニスが迫ってくる。それぞれ形と大きさに差はあっても、そのすべてが例外なく充血し、極限まで膨らんだ最大勃起を見せている。

(これでいいわ……これで……)

何本もの肉棒を咥え込みながら、青のヒロインは心の中で微笑んだ。男たちの注意はほとんどこちらに向いている。スカレットへの淫辱もこれで防げる。後は彼らを全員おとなしくさせるだけだ。

「はあんちゅう……はぐっ、くちゅちゅ……ちゅぷるう……」

(くうう、やっぱり、ペニスって臭い……っ。それにこの気色悪い感触……は、吐き気がするわ……でも、スカレットのため……負けてはだめよ、セルヴィス……っ)

本当ならばこんな恥ずかしい真似は死んでもしたくない。けれど、仲間であるスカレットを助けるためなら……そう思えるからこそ、苦しげに悶える心を隠して、盛った娼婦のように振る舞える。

しかし、そんな気持ちなど知る由もない牡たちは、暴走した獣本能の命じるままに、無数の肉棒を突き出してきた。

「ほおうっ、ほおおっ！ 上手いじゃねえか、セルヴィスさんよお。本当は戦闘じゃなくて、こっち専門なんじゃねえの？」

頭の上から響いてくる嘲りが、自らの発するチュパチュパという淫音とともに脳内に直接流れ込んでくる。ペニスの先端から漏れ出る先走り汁が舌に絡まると、喉に流れる涎が恐ろしく甘露なものになった。

(ふぐっ、違っ……そんなんじや……くううっ、早くイって……っ)

初めのうちはどうということではなかった。けれど今では、額はおろか、うなじから何やらネットした汗に蝕まれ、身体全体が内側から熱せられているような感じを受ける。

ジワジワと広がる淫熱は、突き出された美尻を中心とした下半身にも影響を強く与えていた。時折走るジクリとした甘い電流によって、白桃のようなヒップがブルッと官能的に震える。すると股下に走っているコバルトブルーのスーツ地が、ギューッとお尻の割れ目に食い込んできた。今では文字通りの完全Tバック状態になっており、市民の中には、丸出しになったヒップの柔肉に、剛直を擦りつけてくる者もいた。

(は、ああんっ……色んなところ、擦られちゃってる……お、おかしいわ、なんでこんなに……痺れるの……？ 早くヌケるから、嬉しいはず、なのに……あふう……っ)

今や肉ペニスは口と尻だけではなかった。両手でシコシコとしごくのは言うに及ばず、

胸の谷間や脇の下、ムチリと膨れた太腿に臍の穴と、その数は時間が経てば経つほど倍々に増えていく。

変化は端正な美貌にも及んでいった。初めは男たちの気を惹くために、わざといやらしい顔をつくってみせた。しかし、今は何も意識しなくても眉根が蕩け、口元に卑猥な笑みが浮かんでしまう。頬も赤く上気し、唇からは涎の線が絶え間なく引かれている。

「ふわつくううっ、あんっ、ぐむううううっっ！」

（あ……あはあ……んぐう、お……おいし……い……おいしいわあ……）

先走り汁が甘い……それこそ母親の母乳でも飲み干したような、至福の表情を見せるセルヴィス。だらしなく開いた口からは飲みきれなかった濃い精液がドロリとこぼれ、スーツの上からでもわかるほどに勃起した乳首を伝い落ちる。

「すげえ顔してんな。人前でチンポ頬張ってるのに、瞳が潤んでやがる。こいつも変態だ」  
（へ……変態……？ 違っ……わたしは、スカーレットのために……だっって仕方が……んぐううううっっ！）

一度先端まで出されたペニスを再び突き込まれた瞬間、陰部から熱した蜜液がゴブオツと噴出された。お尻の割れ目を伝って、ネットリとした本気汁が床に零れ落ちる。スーツに押し付けられた股間部には、淫らに咲いた花びらがくつきりと浮かび上がっていた。

「おいおい、本当のこと言われたからって、そりゃないぜ。なあ、女神様」

嘲られた途端に、子宮がカッと熱くなり奉仕のスピードがグニッと上がった。スカーレ

ットを助けなくてはならない。そのための奉仕。そう頭ではわかっているのに、汗と精液でドロドロに湿った肉体は、牝の官能を休むことなく全身に送り込んでくる。

「んむうううんんっ……はっはっはっ、じゆるううっ……はほおおお……っっ」

(だ、だめえ……興奮しちゃってる……わたし、市民のペニスで欲情してる……っ)

守るべき者に奉仕して、感じてしまっているという事実が、青の女神を背徳の悦楽へと導いていく。瞳がキラキラと妖しく輝く。唇の中で淫靡に蠢く舌が、魔性の快楽を搾り取るうと、滾るペニスに情熱的なタッチを繰り返していた。

「おいおい、顔がきついぜえ。奉仕するなら、さっきみたいなアへ顔じゃなきやなあ」

「ふぐちゅううっっ……ほうわうっぐ、らめえ……ほんらにはやふは……はううっっ！」

後頭部を押さえ込まれ、素早いストロークを強制された。しかし、理性の限界とは裏腹に、鍛え上げられた口淫技は、男のモノをより強く、より激しくジュブジュブとしごき上げていく。口をペニスに沿わせる度に、スーツの中でギューギューに張り詰めている双乳がブルンブルン揺れ動き、股下がジュンツと湿った。

(んふおおっっ、きもちっ、きもちイイいっっ！ だめよお、こんなの……頭が灼けてく……お願い、早く出してっっ……出してえええっっ！)

熱い鉄棒のような怒張に艶かしく舌を絡みつけ、一心不乱にしごき立てる。理性はもう暴発寸前だ。お腹は沸点をとっくの昔にオーバーしている。残された手段は、快楽に溺れる前に、桃色の海原を泳ぎきるだけだった。

「んぐっ、あふるううううおおおっつっ！　ちゅぶちゅぶ……しゅじゅゆるうおおっつっ！　ぺちやぐりゅううっつ……はあはあ、はんぐうううっつ……」

ショートヘアの銀髪が上下に激しく振り回され、汗に染み込んだフェロモンがばら撒かれた。口の中のペニスがどんどん膨れ上がっているのがわかる。身体中に擦りつけられている十数本の肉棒も、最初の頃とは桁違いの熱量を感じさせる。身体が燃え尽きてしまうほど熱い。理性が、仲間への信頼が悲鳴を上げて、ドロドロの淫悦に呑み込まれていく。

「あんたは俺たちを守るのが使命のはずだろ？　それがどうよ？　チンポしゃぶってマ○コ濡らすなんてな……はっ、正義の剣士が聞いてあきれるぜ」

「ほんふあほお……むぐうっつ！　ひふうあっつ！　か……っつ、ふじゆるおおっつ！」  
まるで口が第二の陰唇になったかのように感じられた。奉仕しているのは紛れもなく自分のはずなのに、牡の力によってレイプされているような錯覚が走る。

（あ、ああ……もう、だめえ……口がアソコになってる……燃えるっ！　溶けちゃうっ！）  
自分は今、市民たちの前でどれだけ浅ましくフェラチオをしているのだろうか……考えただけで恥ずかしさが子宮を熱く灼いていく。自らの痴態を想像することが、守るべき人々に背信することが、こんなに気持ちの昂るものだとは知らなかった。正義を守護する青の女剣士は、自らの内側から一斉に湧いた桃色の感情に、身も心も委ねきった。

「うほおおっ！　もう限界だっ、イクぜっ！　おらあああっつっつっ！」  
ドピユピユオオツツツ！　ブシヤアアアツツ！　ビュルルオオオツツツ！

青の変身スーツに包まれた魅惑の肢体に向かつて、三百六十度、あらゆる方向から一斉に発射されるザーメンの飛沫。生暖かい白濁液が、顔面を中心にして波紋のように広がり纏わりついてくる。全身が気色悪くネチャつき、頭がどうにかなくなってしまいそうなくらいの牡と牝のミックス淫臭が、鼻をいやらしくヒクつかせる。

「んふおあああつっつ！ ふごおおおおおつっつつ！」

（あ、おとおつっ、い……イクツツツ！ こんな……みんなのセーキで……わ、わたし……い……い、イックウウウツツツツ！）

スーツはおろか、髪や口内にぶちまけられた強烈な精液の臭いを嗅ぐだけで、頭がクラクラして何も考えられなくなってしまう。熟れた柔肌にぶっかけられたザーメンの灼けつくようなベトベトした感覚が、狂おしい。鍛え上げた女剣士の美肉すべてが快楽に踊り、完全に染みついた精液の臭みが、女神の清らかな心を淫らな色に腐らせていく。

市民たちの精液まみれになったコケティッシュボディがグウウンツツと仰け反る。適度に筋肉ののった官能的な美肉が、瞬間的にキュツと固まった。全身から迸るマゾ快感に、股間の花びらからブシユオオオツツツ！ と大量の絶頂汁が噴射される。飲み込めきれずに溢れた濃厚ザーメンだったが、男たちに強引に顎を掴まれ、強引に飲まされた。

「か……つ……あ……あ……ふううう……」

精液で真っ白になった視界の端に、拘束されたままの紅の死天使が映った。自分の助けを待っている仲間……だが、果たして彼女はこんなにも素晴らしい快感を与えてくれるだ

ろうか？ 答えは否だ。全身を痺れるような甘さが貫き、もうどうにでもして構わないと思えるあの感覚。それを得る方法は――。

白濁に染まった青の女神は、肉欲に魅せられた淫魔の表情を浮かべる。犬のように浅ましく尻を振った。胸を強調し、股を開いてフェロモンを撒き散らす。

「もっごと奉仕させて……ください。皆さんのセーエキが……ああ、たまらないんです……」

法悦の懇願。そして、正義のヒロインはただの牝豚へと墮ちていった。

「んあああつつつ！ ひゅごい、ひゅごふひるううつつ！ ふ、おとおおつつ」

かつて希望の星だった美しいコバルトブルーで彩られていた強化スーツは、その力を発揮することなくドロドロとした白濁液に染め抜かれ、真っ白いものへと変わっている。美しかった銀髪も、まるで脱色したかのように白一色だ。

「いやらしい口マ○コだぜ。それで本当に正義の女神かよ？ 身体売って助けてもらってたんだろ。ギャハハ」

嘲られることの悔しさは確かにあった。けれどそんなことは、もうどうでもいい。

（イイ……みんなに犯されて……気持ちイイのが……好きいいつつつ！）

蕩けた牝顔で、目の前の肉棒にキスをする。別のペニスを両手でシユコシユコとしごき上げると、両掌がアソコそのものに思えた。

果てしなく湧き上がる肉欲が、気高い理性を困惑させ、倒錯させる。「スカールレットを

救出する』という当初の目的は、『精を搾り取る』行為だけを残して消えうせた。火照りきった肉体は、快樂だけを寄生虫のように吸い上げて、穢れのない青の女騎士を欲情した牝奴隷へと作り替える。

「んんぐつつ、ふんぐうつつ……あは、もつと濃いのかけてえ……ちゅばちゅちゅ……おチンチン欲しいのお……っ」

全身をくまなく動かして、溢れ出る快樂を享受する。狂い始めた女体と疼く子宮が、灼熱した精液を求めて暴走する。

「ハハ、まだセーエキ欲しいのか!? ど淫乱めっ、お望みどおりたっぷりとかけてやるよっ」

「んんっ、そうっ、そうよ！ そうそうそおうっ！ セルヴィスは欲しいのっ！ みんなのセーエキっ！ ぶっかけてっ！ 汚してえええつつっ！ はあ……ああ……つつ」

守るべき市民に投げかけられる淫語が、ありえない快感を巻き起こす。仲間を見捨てたサドの快感と市民に罵られるマゾの悦楽が、子宮の中で融合し、かつて経験したことのない快感を爆発させた。もう、戻れない。戻りたくなどない。

ブバアアツツツ、ブチュウツツツ……ジュバシヤアアアツツツッ！

口に、両手に、胸に、耳に、髪に……あらゆる場所にぶちまけられる精の嵐に、美貌の剣士は悩乱した。ムワツとした淫臭が全身に擦りつけられただけで、肉厚の太腿が狂ったように痙攣する。駆け抜けた電流が赤く染まった柔肌をブルブルと震わし、細く尖った頤が待





ち焦がれたように天を衝いた。

「ああつつ！ き、たああつつ、臭いのおつ……好きいいつ、わたし臭いの好きいいつ！  
あへあ……顔ドロドロオ……んちゅば……くふうう……つ」

流れ落ちる精液をペロペロと舐め取る姿からは、女神としての気品や強さなど、もう微塵も感じられなかった。ビクビクと震える全身から溢れ出る汗が、こびりついた白濁液と混じり合い、かつて正義の旗印であった青の戦闘スーツを汚していく。

ドピユオオオツツ、ビユブビユチユオオツツ！

「ふごおおああつつつ！ あ、ついのおおつつつ……かかっているつ、ぶっかけられてるううつつつ！ イクイクイクイク、イックウウウツツツツつ！」

雷に打たれたように青い肉体がビククウツツと跳ね上がった。煮えたぎったマグマに征服された蜜壺が爆発し、ビュビュツツと湧いたばかりの本気汁を噴射する。脳内が一瞬で桃色に塗り替えられ、悦楽の天頂が目の前に迫る。

「真っ白おおつつ……イ、イグウツ！ セーエキがいっぱい溢れてる……洪水になってるうつ！ イグ、またイグウウウツツツツつ！」

流し込まれた淫液が豊満な肉体をスーツごと浸し、痙攣する股間をなぞりながら滴り落ちる。広がりきった陰唇から、ドププツと溢れる大量の精液の感覚がたまらない。

「あ……ああ、セーエキ、いっぱいちょうだい……ゾクゾクするのお………つ」

もうザーメンの臭いだけでイケる気がした。

切れ長の瞳に溜まった大粒の涙は、悲しいからではない。嬉しいのだ。気持ちがよくてたまらないから出てくるのだ。もう何者にも邪魔されずに、「嬲られる」ためだけに存在することができる。ご主人様に仕え、イカされる。玩具にされる。それが牝奴隷。それが自分の幸せ。いるべき場所だ。

「おああつつ、イヒイイイッツツツ！ イクッ、イッグウウウウツツツ！」

何が起こっているのかも、判別できないほどの快感に肉体も精神も溺れてしまっていた。快樂に染まった昇天の果てに何度も何度も昇り詰める。しかし――。

「……っ!? あ、ぐあ……あああつつ！ な、なんだ、これ……!? イケな……いいいいいっつ！ なんてっ!? イってるのにつ……気持ちいいのにいいいっつっ！」

快樂に屈しかけた女戦士の魂が、思いもよらなかつた事態に悩乱する。確かに理性が白濁し、柔らかい光に包まれている。それなのに、あの突き抜けるような解放感、どうにでもしていいと思える気持ちよさが欠片も感じられない。残るのは各性感帯に残る尋常ではない疼きとたまらない焦燥感のみだ。

「たまらないでしょう？ イキ慣れたおネエちゃんに我慢できるわけないわよねえ。おネエちゃんて、ペニス大好きな牝豚だから、ペニスでしかイケないようにしちゃったの。大変よお、早くなんとかしないと壊れちゃうかも……くすくす」

まるで人事のように、致命的なことをサラリと伝えるシオン。

屈辱と越えられない絶頂感が湧き上がる。イクにイケない焦らし淫獄に、深紅の戦姫は

涙を流して悶絶した。

「あぐふおあつつつ！ ひふおおつつ、胸が……止めえりえええつつ、つふおあああううつつつ！」

肝心の、最後の一撃が加えられない牝本能は、ブレーキのきかない暴走列車のエンジンのように、キャパシティ限界の熱量を含んで燃え盛っている。カチカチと震えた歯が音を立て、眉根が限界を超えて垂れ下がる。頂点を迎えられない女芯では、淫液を吐き続ける肉アケビが止まることない狂痙攣を繰り返していた。

しかし、イケない。突き抜けられない。

「あ、くふうおあつつつ！ イクイクイクツツッ！ ああああつつつ、イケない……イクツ……も、狂ううつつつ！ いひいいいいつつつつ！」

心臓が今にも飛び出しそうに高鳴っている。五感すべてが快感に持っていかれてしまい、あらゆるものが肉体の絶頂を後押しする。

それでもイクことはできなかった。全身が火の玉になってしまったかのような錯覚に陥る。神経が一本一本切断され、絶頂快楽に繋ぎ替えられている。目の前にはあと一歩で手が届く楽園が広がり、全身を這いずり回る触手の感触がたまらない。スーツに染みついた精液の臭い、陰唇を擦り上げる淫らな音が限界の焦燥感を煽り立てる。

「苦しうねえ、おネエちゃん。ふふ、イキたい？ ねえ、イキたいでしょ？ イケると思ってるでしょ？ でもだあめ……ガルデ様あ、よろしくお願いしまあす♪」

猫のような甘い声が響く。白い少女が、いじらしく瞳を細めて笑うと、後ろのサイボーグがにんまりと頷いた。

「クク、わかった」

ジュブブブツツツ、グチヨオオオオツツツツ！

ガルデの背中から一本の巨大な触手が現れた。ヌラヌラとした媚薬スライムを全面に纏わりつかせた機械触手が、スカーレットのトロトロに蕩けきった陰唇に突き刺さる。

「ひっぎああああつつつつ！ お、おほっ、おふおっあああつつつ！」

「こんなことされても……」

シオンが目で合図を送ると、ガルデの胸部から新たな形状の触手が現れた。先端がドーム状になっている触手は、半円球を描くラインが透明になっており、先端には細長い管のような針がある。不気味に蠢くそれは、まるで巨大な蛸の吸盤のように見えた。

チュオオツツ、チュチュウウウツツツ！

「けひやうるあああつつつ！ ヒ、ヒグウツツツ！ キツうおおおつつつ！」

けたたましい吸乳音とともに、牝の咆哮が響く。勃起しきった乳首にプニユリと刺された先端部、それと胸の半分を覆いかぶさるようにはめられたドーム状の触手が、噴出していたミルクを強制的に搾乳する。

自然噴射などとは桁違いのスピードで、胸に溜まったミルクが吸い出されていく。勃起クリトリスに勝るとも劣らない性感帯となっている乳腺。そこを激流となって走り抜ける

淫母乳の洪水に、深紅の死天使は半分、白目を浮かべて狂乱した。

「あああつつつ！ あお、おふおおおおおおおおおおおおおつつつ！」

濃厚な牝臭を含んだ脂汗が、全身からブワツと放散された。乳房に負けず劣らず、下半身を溶かす蜜壺では、グチョグチョといやらしい音を響かせて、ペニス触手が女壺を掻き混ぜている。本来ならば、壊れてしまうほどの絶頂淫獄に陥っていてもまったくおかしくはない。悦楽電流に灼かれた牝の身体が子宮ごと融解してしまふほどだ。しかし――。

「こゝんなことされてもお……絶対にイケないのよねえ……アハ、アハハハハッツツ！」

「い、いひいひいひいひいひいひい！ イキたいイキたい……あ、はうおおあああつつつつ！」

紅のスーツを媚葉スライムでグジュグジュにしながら、今にも死んでしまいそうな勢いで嬌声を張り上げる深紅の牝奴隷。

黒髪少女は、首輪に繋がれた鎖をグイッと引き寄せると、墮ちた死天使をまるで家畜か玩具でも見るような、蔑んだ瞳で笑った。

「わかってるんでしょ？ どう言えたいイキるかかって……言っちゃいなさいよ。言えば楽になるわよお……ほおら、イキたいイキたい、おネエちゃんはイキたい」

シオンな執拗な煽りに、瞼の裏で白い火花が弾け飛んだ。唇が小刻みに震え、背筋がしなる。覚醒した瞬間にお預けを喰らったマゾ牝本能は、激烈な疼きに狂乱する脳髓に命令を下す。即ち、懇願せよ、と。

「ぺ、ペニスほしいのおつつ！ 突っ込んでつつ！ お願い、イカせてえええつつつ！」

牝本能の命令どおりに、女幹部の羞恥に満ちた無様な、それでいて艶のある絶叫が響き渡る。しかし、白い小悪魔はそんなマゾ豚をせせら笑った。

「ぶ、あはは……そうよねえ、おネエちゃん……おネエちゃんて結局そういう人なんだよねえ……でも足りない。こんなんじや全然足りないわあ」

一生分の恥を捨てて叫んだというのにまだ足りない。イカせてもらえない。一度敗北の言葉を口にした美貌は、涙を浮かべて絶望した。

（イキたい。イキたい。イキたい。イキたい。イキたい。いっつつつつ！）

そもそも自分は最早ヒトではない。数えるならば「匹」、呼ばれるならば「モノ」なのだ。なのに、なぜまだ絶望する？ 尊厳など捨てればいい。好きなだけ乞えばいい。仲間を見捨て、見捨てられ、想い人に蔑まれ……もう、墮ちることしか考えられない。

後から後から湧いてくる被虐心と暴発寸前の牝本能に追い立てられるように、スカレットは、涎にまみれた唇から屈辱の言葉を吐き出した。

「ひぐうっ、イカせて……くだ、さい……もう、我慢できま……せん……お願いしますっ」それは、スカレットが幹部になって初めて口にした敬語だった。まさか本当に聞けるとは思っていなかったのだろう。触手を操るガルデの顔が、おぞましく微笑んでいる。

「どうします、ガルデ様？ そろそろ許してあげますか？」

シオンの問いにこれまで責め役に徹してきた、ガルデが口を開いた。

「クク……おい、スカレット。お前の状態を教えてもらわないとなあ。わたしもどうし

ていいのか……どこが大変なんだ、んん？」

舐めきつた態度……前までのスカーレットなら意地でも懇願しなかつただろう。けれど今は違う。なじられることが快感だった。忌まわしい言葉のひとつひとつに背筋が痺れ上がり、軽く絶頂してしまうほどの甘美感が備わっている。ゾクリとするほど淫らな表情で発した言葉は、反抗心などではなく、淫欲に堕ちた牝豚の言葉だった。

「ア……アソコおおつつつ！ イキたいんです……はっぎいっつ、く、おおお……お願ひ、です。このままじゃ……死んでひまひまふつ……あ、あひいっつ！」

シオンが笑いながら勃起しきつた皮剥きクリトリスをギョルツと摘んだ。触手ペニスでグチョグチョのスープのようにされた密壺から、ブシューアアアアアツツと湯気を立てて噴射される本気汁が、引き締まった美脚をベツトリと濡らす。

「あ……ああ……ほ……おおおおおおつつつ！」

自分が何者なのかということすら掻き消えてしまいそうだった。全身が荒縄で縛られた剥き出しの性感帯のように感じられる。そこにはただ無限に広がる快楽への欲求だけがあった。プライドなどは存在しない、もうそんなものはどうでもよかった。

黒髪的美貌が、気が触れたようにニタアと笑った。

「マ、マ○コつつ！ ガルデ様あつつつ！ い、挿れてくださいっつ。スカーレットの牝穴に……いやらしいマ○コに……どうか、どうかガルデ様の太くて逞しいペニスをブチ込んでやってくださいいいいっつつ！」



もう何もなかった。身体の奥底から求める劣情の奔流が、女幹部の理性を完膚なきまでに押し流す。今まで口にすらしたことのないなかつた卑猥な言葉、男に媚びるだけの牝の言葉が後から後から湧き出てくる。浅ましく腰を振りたくり、ありとあらゆる液体を身体中から垂れ流す。

「クク、よく言えたな。仕方ない。挿れてやるとしようか。ありがたく思えよ。ただし後ろの穴にな。スカレットは後ろのほうが好きだったなあ？」

一瞬、異を唱えかけた。が、しなかった。すでに場所や犯り方がどうこの次元ではない。とにかくイキたい。イカせてさえくれるのなら、悪魔に犯されても構わなかった。

「は、はいっつ！ はい、はいいいいっつ！ ああ、ペ、ペニスっ！ ガルデ様のモノおおっつ！ 早く、早く……早くううっつ！」

ヌウと出されるガルデの肉ペニス。その大きさは戦闘員の強化ペニスの比ではなかった。飾り気はまったくないが、とにかく太くて長い。シンプルでいて重厚。スカレットが目にした中で、文句なしに最大最凶の男根だった。

尻の蕾に怒張しきった超極大機械ペニスの先端が触れる。たったそれだけで腰が抜けてしまい、収縮する腸内から粘りを帯びた尻粘液が溢れてきた。待ちに待った肉棒の挿入を迎えた美貌は蕩けきっていた。

ズチュ……クチュクチュ……ズチュオオオオッッ！

瞬間、すべての景色が白濁に包まれて、霧散した。時間が止まり、永遠とも感じられる

恍惚が、光を失った瞳の奥で輝き続ける。

「はっぎいいいいつつつ！ くおおお、お……おおおおつつつ！ イクウウウツツ！ あ、ああ、イクイクイクイクイクイク……いつてるのおおおおつつつ！」

これまでで最大級の牝の咆哮が周辺一帯に響き渡った。やっと辿り着けた女の天国に、触手に巻かれたグラマラスボディが狂乱する。地獄ともいえる禁欲から放たれた牝奴隷は、自らの肉体と精神のすべてを使って、溢れた歓喜を表現した。

ブシュツツ、ブシュシュツ……シユブオオオオオオツツツ！

触手を突き込まれた肉唇とバキューム搾乳に処されている双乳から、盛大な祝福の蜜液が噴射される。ただでさえ肉感的な女体は、ひきつつたように異常な痙攣を繰り返し、発情した牝の香り立つ匂いを発散させていた。

「あ……あう……スカーレット……気持ひイイの……？ ず、狡ひいいいいつつ！ わたひも……わたひもイクのっ！ もっふお、犯されるのおおおつつつ！」

完全に欲情に沈んでしまった声で、白濁まみれの青いスーツの美女が近づいてきた。市民たちへの奉仕だけでは飽き足らない、盛りのついた牝の情欲が新たな快楽を求めたのだろう。輝きを失った碧瞳が、爆発したように母乳を噴き出す乳首を物欲しそうに見つめる。

チュブ……チュチュチュ……ジュルオオオオツツツ！

「はふにゅあああつつつ！ セ、セルヴィ……ふむうおおおつつつ！ 吸われへるつつ！ わたひのミルクがああつつ……チュウチュウつてえええつつつ！ イクウウウウウ

ツツツツツッ！」

キュポンツと触手バキュームを剥がし取ったセルヴィスは、まるで生まれたての仔猫のように、スカーレットの嘔き出る母乳を吸い始めた。その瞳にはもう情欲を貪ることしか映っていない。ただ湧き上がる疼きのままに虐待を享受した。

「あふうつ、スカーレッツふおのひるふ……んきゅ、じゅりゅぐううつ……あまふて、おいひいふお……もつふお、もつふお……ちゅくう……」

触手に拘束された紅の美女と白濁にまみれた蒼の美女が、いやらしくも美しく絡み合う。そこにはもう、破壊天使と救世の女神と呼ばれた凛々しい姿を見つけることはできなかつた。強化スーツをたつぷりの汁気で包み、誰にも真似することのできない屈服のアへ顔を浮かべて壮絶な勢いでイキまくる牝奴隷がいるだけだ。

「あはは、おネエちゃん、気持ちよさそうねえ。わたしも吸わせてもらおうわね。きつといやらしい牝の味がするんでしようねえ」

白目を剥いて全身痙攣し続けるスカーレットを、シオンが嬲る。シオンは触手のバキュームを取り外すと、いじらしい瞳を浮かべて、ギユンツとそそり立った美乳首にしゃぶりついた。青と白の子猫たちの甘噛み吸引が、紅の女戦士をさらに上へと昇らせていく。

「むごおおおおつっつ！ ふんふおおおつっ！ ヒゲウウツツ！」

高々と嬌声を生み出し続ける薄紫で染められた唇に、機械触手が突き込まれる。口内に注ぎ込まれる媚薬スライムが、あつという間に口粘膜に染み渡り、口でもイケる身体に改

造される。グジュグジュと出し入れされる触手の先端が喉を突き、舌を擦り上げる。それだけで、イった。とにかくイキまくった。

恥ずかしいと思えば思うほど、身体が火照り、肉の食いつきが増した。初めての仲間、そして心から守りたいと願った少女に母乳を吸われて悶絶している自分がたまたまなく恥ずかしく、信じられないくらい気持ちよかった。

強く繋ぎ止めたはずの絆ですら、荒らぶる牝の肉欲を高めるためのものでしかないことを実感させられる。大切な二人によって自らの信念が溶かされ、色情に溺れていく。そんな情けない自分を思い浮かべる度に、全身をありえない量の桃色電流が駆け抜け、頭が真っ白に灼けた。

（はあはあ、きもひイっ！ 全部が、イイのっ！ こんな……もう死んでもいいっ！）  
全身の卑猥細胞が唸りを上げてフル稼働しているようだった。腹の底からカッカッと熱いものがとめどなく湧き上がり、絶妙なエクスタシーが身体中を駆け巡る。それが逆に、最下層にまで転落した自分に対する被虐感を煽り、ドオウツツと特濃の本気汁を休むことなく噴出させる。

「クク、よく締まるケツだなあ。スカーレット、わたしのセーエキが欲しいか？ お前が憎み、見下したこのガルデ様のセーエキが……欲しいのかあ？ フハハッ」

蜜壺にぶち込まれた触手ペニスと直腸越しに擦れ合うサイボーグの超ド級ペニスが、ブクンツとさらに大きく膨れ上がった。ついさつきまで殺すことしか考えられなかった相手

の肉ペニス。それが今、暴発寸前にまで高められ、自分の不浄の穴を抉り犯している。

悔しさはまるでなかった。そんな感情はもう存在しない。堕ちていく感覚が怖いくらいに気持ちがいい。かつてセルヴィスを倒し、破壊集団「ヴァルクエツ」のナンバーツーに君臨した深紅の美戦士は、ニヘアと淫靡に笑った。そして、奥底から溢れかえるとめどない桃色の感情に、身も心も売り渡した。

「セーキ欲しいつつつつ！ ガルデ様のセーキっ！ ああ……っ、スカレットはもう一生、ガルデ様の牝奴隷です。いつでもチンポのお世話をします……ケツでも、口でも……穴ならなんでもおとおおつつ！ だから……だからあああつつつ！」

脳髓で甘すぎる感覚が弾ける。ブシュツツと蜜壺が破裂する。幾筋もの乳腺がすべて開ききり、最大級の射乳絶頂が砲弾のような双胸を、快感で爆発させた。尻の穴が、かつてないほどに蠢動する。マゾの感覚が極限まで張り詰め、墮落を受け入れる準備は整った。「出してええええつつつつ！ マゾ奴隷のスカレットのケツマ○コにいいつつつ！

濃いのっ、臭いの出してくださいいいつつつ！」

「ようしつつ！ 受け取れ、スカレットっ！ これがご主人様のセーキだぞっ！」

ドビュオオオツツツ！ ジュボブオオオオツツツツ！

「あぎひいああつつつ！ で、出てるうううつつつ！ セーキいいつつ！ ガルデ様の、ご主人様のセーキがああつつつ！ うれひいつ！ ありふあほうございまふううつつつ！ イクウツ！ イクイクイクウのおおああああつつつ！」

破滅的な激感がドオウツと腸壁を押し崩し、ドロドロの白濁液が直腸すべてを満たす。あまりに大量の精液の注入に、スカーレットのスレンダーなお腹が、まるで妊婦のようにポコッと膨らんだ。腸を通り越したザーメンが、胃の中でジェル状の媚薬スライムと混じり合う。身体の内すべてを牡に征服され、墮落した死天使は、恐悦の笑みを浮かべた。

「ああっつ！ イクううっつ！ イクのが止まらな……おっぱい吸われるのがイイっ！ もつと、もつと吸ってええっつ！ んぐおうあつ、ガルデ様あ……スカーレットのケツマ○コ、おいひいでふかあ？ ケツマ……イッツグウウウツツッ！」

スカーレットの身体が新たな痙攣を起こして悶絶した。いまやどこからどこまでが絶頂の切れ目なのかもわからなくなっている。果ても果てもつぎることのないエクスタシーの嵐の中、かつて恐怖の代名詞として人々を畏怖させた、紅の破壊天使だったモノが完全に壊れ、桃色の悦楽螺旋の中で消滅していく。

ふいに、周りに大勢の気配を感じた。ムワツとした熱い空気の塊に包まれたような感覚。周囲を先ほどの市民たちがぐるりと覆い囲んでいる。皆、目を血走らせ、男というより、発情した牡“と”いったほうが正しいように思えた。

「『ヴァルクエツト』に用はないっ。俺たちはこいつらに復讐したいだけだっ！ この裏切り者の淫売女と、その変態牝幹部になっ！」

言った男たちは、白濁とミルクにまみれた青いスーツの女剣士を掴み上げ、スーツの胸部分をバリリッと剥ぎ取ってみせた。露わになった芸術的な乳房をぐにゅりと驚掴みにす



ると、甘い痺れを感じた白濁の女神が艶のある声とともにビクビクと震えた。

男たちは皆、わずかに前屈みになって、呻き声とも笑い声ともつかない不気味で低い音を発している。股間を見れば、下品なことに剥き出しのペニスガビキキツと天頂に向かつて突き出ていた。

「クハハッ、そうかつ。そんなに言うなら好きにさせてやる。ただし、わたしもまだまだ抜き足りないからな。邪魔だけはするなよ」

サイボーグの許しを得て、完全に理性のタガが外れた市民たちが一斉に紅と蒼の牝奴隷に襲いかかってきた。シオンは喧騒を嫌ったのか、いつの間にかどこかへ消えている。

ズチユルオオオオツツツ！ ゴブツ、ズボオオオオオオツツツ！

「はああうううやううぐああふおおおああつつつつつ！」

スカレットの肉体が官能の渦に包まれたように、ビクッビククウツツと大きく跳ね上がった。身体はいまだに触手が雁字搦めにしていて身動きが取れない。大量の淫汗を吸った深紅の戦闘スーツは、より一層乱れた状態で朱色に火照った素肌を扇情的に彩っている。

めくれ上がった紅のマントの下の黒いクロツチの奥では、通常のモノの三倍はあろうかというガルデの極大ペニスガ、グチョグチョといやらしいストロークを続けていた。お尻には市民のモノが深く深く挿入され、触手によって卑猥にポージンクされた官能的な美肉には、数えきれないほどの牡の欲情が殺到していた。

「ひいいくくおおおつつ！ ひやふううつつ！ もう、らめええええつつ！ イ



クッ！ イクのおおおおつつつ！」

横ではセルヴィスが、市民たちの肉棒をありつたけの牝穴で食い締め喘ぎまくっていた。涙と涎、ドロリとした様々な淫液まみれになった美貌は、快樂に浸りきった牝の顔だ。あんなふうな表情を自分も晒しているのかと思うだけで、背筋がビクンつと跳ねた。

二人はまるで紅と蒼の合わせ鏡のように、お互いの痴態を見つめ、それぞれの被虐感を煽っていく。敗北と墮落のステップが牝豚たちの感度を数段上まで引き上げる。

「クハハッ、どうだ、スカーレット。わたしのチンポを呑み込んだ感想は？」

「はあっ、はいいいいつつつ！ ふうおおああつつつ！ ひゅ、ふごいいつつ、ひゅごいれふううつつつ！ ガルデはまのチンポオオツツ、んおおおつつつ！ ズコズコいいなふあ、スカーレットのマ○コ、抉ってまふっ！ 気持ちイ……イックウウツツツツ！」

快樂の渦に堕ちた破壊天使は、子宮を貫く極大ペニスの為すがままに翻弄されていた。巨体に似合わぬ繊細な腰使いで、成熟した蜜壺を貫いてくるガルデの性技が、脳髓に直接、牝奴隷の幸せを叩き込んでくる。断続的に湧き上がる間欠泉のように、プシュプシュと茹だった白濁の涎が洩れることなく続いていた。

「よくも俺たちを散々苦しめてくれたな、この魔女めっ！ オラ、もつとしごけよっ！」

快感の発生源は何もグジュグジュの陰唇だけではない。情欲と憎しみに身も心も任せた市民たちの剛直が、艶のある黒髪からスラリと伸びた御脚に至るまで、溢れんばかりの白濁液をこれでもかと撒き散らしている。頬から尖った顎にかけて蕩け落ちる精液が、た

まらなく淫らで、男たちの欲望をさらに引き寄せた。

「あああくうおうつつ！ ふえふうわうつ、じゅぐう……べちゅくちゅ……ふむうん、あは、おいひいいつつ！ 手がマ○コになっふあみはひで……つぐうああつつつ！」

シコシコとしごき上げる両手が蕩けるように熱い。最早、全身が剥き出しの性感帯といつても過言ではないほど敏感になってしまっている。子宮がジンジンつと苛烈に燃え上がり、股間が灼熱の溶鉱炉のようになっていいる。連続して吐き出される湯気を纏った淫水が大股開きになった御足を流れ落ちると、それだけで自分の墮落感を実感できた。

ジククウ、グチュウオオツツツ！ グジユグジユ、シユゴオオオツツツ！

数本の亀頭から垂れ流されるトロミを帯びたカウパー腺液が、女戦士の手に染み込んでいく。掌の中でドクドクと脈打つ肉棒が、感じたこともないくらい愛おしく思えた。魔根にいやらしく絡まる十本の細指。それに吸いつくネチャネチャとした感覚が、どうしようもない熱い疼きを、女体の芯から湧き上がらせる。

完全に惚けてしまった瞳で、チラリと横を盗み見ると、青のスーツを同じように白濁で染めた銀髪の美女が、幾本もの勃起肉棒を啜え込んで、恥知らずな嬌声を喚き散らしていた。

「ふじゆるうぐういうああつつ！ チンポいいつつつ！ チンポ、チンポ……はひゆるううつつつ！ あぐむうう、ふぐむおおつつつ！」

豊満な肢体を触手で搦めとられて、肉棒に奉仕し続ける青の女神は、ビクビクと身体を

震わせながら、熱い吐息で内に巢食う劣情を発散させている。

淫らな競争心がスカーレットの牝本能に鞭を入れる。思うがままに任せて、張り出した美腰をグルングルンつとグラインドさせる。まだ犯されていない箇所はないか……まだ開発されていない秘奥はないか……より淫獄の高みを目指して、紅のスーツが脈動する。

「堪んねえぜっ、こいつのケツはよおっ！ どんどんエロくなつてきやがるっ。ハハッ、最高の肉便器だぜっ！」

「ばあか、それを言うならこの手コキの凄さっ！ ハンパじゃねえよっ。おおっ、そこイイぜえっ！ おほほっ、まるでマ○コみてえに柔らかいやっ」

あらんかぎりの罵倒を受けながら、スカーレットは悶絶した。かつて戦闘員と同じくらいに見下していた市民たちに、家畜のような扱いを受けることがたまらなく気持ちがいい（もつと言つてつっ！ もつとなじつてええつっ！ わたしは、最低のマゾ奴隷なのつっ！ もう狂つちゃうのおおつっ！）

「んはあつっ！ ひいあああつっ！ おほおおおつっ！ は……くおつああつっ！」  
スレンダーな肉感ボディが、触手を引きちぎるような勢いで跳ね上がる。

「あのスカーレットが俺たちのチンポでヨガリ狂つてやがる。くひやははっつ、傑作だなっ。おらあつ、詫びろよっ。この牝豚がっ！ チンポ欲しけりやねだつてみろっ！」

途方もない屈辱の言葉。だが今は求めてやまない至極の言葉だ。スカーレットはブルブルと身体を震わせながら、迷うことなく「おねだり」した。

この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<http://ktcom.jp/>**